

活動報告：発達障害支援事業

1. 「発達障害支援事業」のねらい

本活動は、子ども・子育て支援研究センターおよび私立大学研究ブランディング事業「地域共生のための対人援助システムの構築」の一環として、2017年9月より開始された。本事業は、発達障害を伴う子どもとその保護者の方々の支援を目的とし、①発達障害が疑われる子どもの認知行動特性の把握（面談と行動観察）、②心理・神経心理アセスメント（検査）、③上記結果を踏まえた支援方略の作成、④子どもへの定期支援の実施、⑤対象児および保護者の支援・カウンセリングなどを行っている。

2. 「発達障害支援事業」の活動状況

「発達障害支援事業」は、2017年6月から8月までの準備期間を経て、9月から本格的に活動を開始した。

日時は隔週火曜日、16時30分から18時で、上記①および③に関して真田、上記①、②、③、④および⑤に関し、大野呂、②、④および⑤に関し安田（臨床心理士）、上記④に関し虫明（LD支援実践者）の計4人が担当した。2018年4月から安田および虫明が、菅原（臨床心理士・スクールカウンセラー）および鳶村（臨床心理士・スクールカウンセラー）に交代し現在も4人体制で活動を継続している。なお本年2月から、本学学生1名が同活動に参加し実践研修を行っている。

（1）利用者の実態

2017年9月から2018年8月までの1年間の利用者数、来訪理由、紹介者、支援などの概略を以下に記す。

- ①利用者数（利用回数）：26名（89回）
- ②来訪理由（主なもの）；学習面の問題：7、対人社会性の問題：8、多動・チックなど行動面の問題：3、不登校：1、発達の遅れ：5、言語発達遅滞：1、緘黙：1
- ③紹介機関：医療機関；12、教育機関；9、その他；5
- ④支援：定期的学習支援；1、定期的心理療法（含むスヌーズレン活用）；3

（2）スヌーズレン活用の目的（図1、図2）

- ①心理療法との併用でリラクゼーション効果と

不安軽減の効果を目指す。

- ②学習支援の前段階に利用し、集中力の向上を目指す。

- ③上記①および②について客観的効果判定を行っている。



図1 スヌーズレンルーム
バブルチューブ（真ん中）、サイドグロウ（右）



図2 スヌーズレンルーム
スーパースナッププロジェクション、ミラーボール

3. 学外医療機関との連携活動

同支援事業は2018年4月より大野はぐくみクリニックの大野繁院長を本学非常勤講師として任用し、同機関との連携活動の強化を図っている。この活動により、医学と教育の連携による、発達障害児・者の実態把握、早期診断、評価および支援に関する研究を促進・充実させ、得られた知見を速やかに社会に還元すること目指している。

4. 今後の課題

学習支援や心理療法など定期的な支援活動の充実および保護者の支援活動の充実を計りたい。

（文責：学芸学部 子ども学科 真田 敏）